

食べることも出来ることの幸せ

作新学院中等部 二年 山崎 瑠斗

私の祖父母は、数年前まで、米作りをして
 いた。祖父母の家では、五月のゴールデンウ
 イークのころに田植えをし、九月上旬ころに
 稲刈りをしていた。この時期になると、僕た
 ち家族や親せきが集まり、祖父母の手伝いを
 した。従妹と泥たうけになりながら、小さな
 苗を植え、その苗が、秋には稲が実り、今度
 は従妹と痒い痒いと笑いながら、稲刈りをし
 ていたことが良い思い出だ。

祖父母は、一年間を通し、大事にお米を
 育てていた。田植えの後は、毎朝早朝から田
 んぼへ見回りに行き、その日の天気と苗の成
 長に合わせて、田んぼの水を調整し、夕方に
 も田んぼへ見回りに出向いた。大雨や、台風
 などに一喜一憂しながら、苗の成長を見守っ
 ていた。
 そんな祖父母の作るお米は、真っ白で、甘
 おいしかった。最高に美味しいお米だ。毎年、

祖父母から届いた新米を、家族が口にする時
は、どんなに美味しいお米の味がするのかと
少し緊張した。祖父母の愛情が注がれたお米
は格別の美味しさで、幼いころから、祖父母
に感謝の気持ちを持ち、お米を残さず食
べようと思っようになつた。
そして、僕には、もう一つ、絶対にご飯を
残してはいけないと思っよう理由がある。それは、
テレビで流れていた一本のニュースを目にし
てからだ。

そのニュースは、発展途上国の死者につい
てのニュースだ。食糧難に苦しむ発展途
上国の国では、五秒という短い時間の間に、
一つの小さな命が失われていく、というもの
だ。この言葉を聞いた時に、食べ物を残
したことがある自分が恥ずかしくて、とても
後悔した。さらに、衝撃を受けた映像が流れ
た。今でもはっきりと目に焼き付いているが、
幼い子供達が、少しでも空腹を満たすために、
ゴミ収集車に飛び乗ってゴミ袋から食べ物

あさつたり、ゴミ収集所にあるゴミの山に登り、ゴミの中から食べ物を必死にさがしている光景だった。これが本当に同じ子供がしていることなのかと、僕は受け入れることができなかつた。同じ地球の中で起こっている現実だと思ふと、とても恐怖を感じた。

僕たちの住む現代の日本は、食べたい物を簡単に手に入れることができ、幸せな国だ。祖父母が幼かつたころは、自給自足の時代であつたため、自分下手をかけて育てた食物を

大切に食べていた。しかし、現代では、身近にコンビニやスーパー等があり、炊いてあるお米等をいつでもどこでも口にすることができるのだ。空腹だからといって、苦しむようなことはない。むしろ、簡単に手に入る世の中だからこそ、つご飯を食べることへの感謝の気持ちや薄れている世の中になつてい

るのではないのだろうか。祖父母は、お米を作りたいたいという気持ちは持ち続けていたが、高齢のため米作りを断念

するしかなかった。しかし、幸いにも、祖父
母の田んぼは、近所の方から米作りを続け
てくれているため、我が家には変わらず美味
いお米が届けられている。

食卓に並ぶご飯は、農家の方の沢山の苦
勞と愛情がこめられた食材と調理をしてく
れる方の手が加わった物であること、そして
世界には、ご飯を食べたくても口にすること
ができません、命を失う人達がいるとい
うことを絶対に忘れてはいけな**い**と強く思
う。

今僕たちができることは、当たり前にご
飯を食べられることが当たり前ではないとい
うことを改めて考え直すことではないた
らうか。そして、感謝の気持ちがあふ
れる世の中になっ**て**ほしいと思う。